



香川の地で、女性医師として

塩田 敦子 総合周産期母子医療センター医師（准教授）

東京医科歯科大学での卒業後2年間の研修後、結婚を機に何の縁もゆかりもない香川の地に。うどんはおいしいが、大学のまわりにはお酒を飲むところもない。患者さん達の言葉はわからない。とんでもないところに来てしまったと思った。ただ産婦人科を選んだことは後悔していない。女性の一生をサポートできる、カバーする範囲の広い魅力的な科だ。まずお産に感動し、ターミナルまで寄り添った癌患者さんの悩みに素直に共感できた。今はこれからの時代を担う思春期を支えたいと願っている。

女性外来を開設して丸4年、地域の健康相談や講演をさせてもらう中で、現代女性のばくぜんとした生きにくさを感じる。家事は省力化して、社会的には自己実現している女性が多いにもかかわらず、みんな疲れてストレスをかかえている。中高年女性だけでなく、若い世代は将来に夢が持てずダイエットや性に走り、出産というおめでたいイベントも家族の関係や役割に変化が生じ、早産や帝王切開では敗北感や申し訳なさを感じることも多い。不妊症の悩みも深い。

彼女たちを元気づけるためには、まず自分が元気でいなくてはならない。私のストレスケアはピアノやカラオケ、そしてお酒と漢方といったところ。違う職種のママ友達や、同じ産婦人科の女医さん達と飲むのは一番の楽しみだ。仕事では齋藤 孝さん言うところの「ミッション、パッション、ハイテンション」を合言葉にしている。上機嫌でやらないと外来は終わらない。学生に産婦人科の素晴らしさを伝える時間もないが、「先生の外来の患者さんはみんな明るい顔で帰られますね。」と言われたことは私の唯一の誇りだろうか。

もちろんこうして仕事を続けてこられたことは、家族に恵まれたおかげであることは間違いない。「お義母さんと結婚してよかった」と言うくらいずっと私を支えてくれていた義母が5年前認知証になったことはショックだったが、まわりの事ばかり考えてたいへんそうだった義母が今は楽チンそうだ。夫も家事をよくしてくれるし、大学生と中学生の兄妹もできは悪いがやさしく育てている、ありがたい。

そうして現在絶滅危惧種とも呼ばれる産婦人科医として20年、気づいたときには香川大学の女性医師の中では最長老であった。

本院の医師全体の30%、医員と研修医においては40%を女性医師が占めており、これからも増加することは間違いない。「ワーク・ライフ・バランス」をキーワードに、女性医師が出産、子育て等で職場を離れずにすむよう、続けて働きたくなる病院に、という取り組みが全国で進んでいるが、本院も平成20年にワーク・ライフ・バランス支援室が設置され取り組みを進めている。女性医師支援として、これまでに、シャワー室の整備、院内保育所の開設、週30時間以内で勤務できるパート医師制度や、常勤医師看護師向けに週10～30時間勤務の短時間勤務制度の導入などを行ってきた。

様々な形態での勤務を可能にするためには、『チーム医療』という観点が重要だ。従来より麻酔科や救命救急センターでは、目指すものがひとつで明確であるため『チーム医療』という形態をとりやすかったが、他の科では患者さんの背景、考え方等考慮したうえで方針が異なるため、『主治医』という感覚が強い。しかしこれからの医療はそれでは成り立たない。医者が疲弊していく。患者さんの方も「〇〇先生でなければ」を捨ててほしい。医者が複数で関われば違う視点が生まれるという利点もある。医療者も患者さんも『チーム医療』のメリットを享受できるようなシステム作りが求められている。

女性にやさしい就労環境づくりは、とりもおさずすべての医療者のQOL向上につながるのだ。

学生時代、いくつかの解剖のグループをまわっておしゃべりばかりしていた私に、ある教授が「君は女性週刊誌の記者にでもなった方がいいんじゃない」とおっしゃった。私は今も変わらず女性達を取材しているようなもので、こんなのでいいの・・・?と思う。でもあれから20年を経た私は、女性達をエンパワーメントする術を手にはしているはずだと信じている。